シミュレーション教育と DX を活用した教育実践

○佐藤　史教、中野　千恵子、佐藤　つかさ、中崎　恵理捺
岩手県立大学　看護学部　看護学科

【背景】

精神看護学教育においては、学生が患者と相互作用を通して自己理解を深め、看護実践能力を獲得していくことが求められる。しかし、精神科医療の地域移行に 伴う入院患者の減少、患者のプライバシー保護の重視により、実習において 多様な症状を持つ患者と関わる機会の確保が課題となっている。そこで、教育方法の工夫が求められている。近年、シミュレーション教育やデジタルトランスフォーメーション（DX）を活用した教育実践が広がっているが、精神看護学領域における具体的な実践内容や運用上の工夫を共有する機会は十分とはいえない。

精神看護学におけるシミュレーション教育と実習のDX化は、学生の主体的な学修を支援し、臨床実践力の基盤形成に寄与する可能性がある。本ワークショップが、各教育現場における精神看護学教育の発展に向けた示唆を得る機会となることを期待する。

【目的】

本ワークショップは、精神看護学におけるシミュレーション教育および実習のDX化に関する教育実践を紹介し、その教育的意義や課題について参加者とともに検討することを目的とする。

【内容】

A大学では、学部3年生を対象に、模擬患者（Simulated Patient：SP）を用いたシミュレーション教育による演習を実施している。まず、学生同士でSST(Social Skills Training)を用いて看護実践の練習を行った後、教員が演じる模擬患者を相手に看護実践を行う。演習では、模擬のカルテや床頭台などを設定した上で、精神疾患をもつ患者との実習場面を想定し、実施している。シミュレーション教育による演習により、コミュニケーションや観察、アセスメントの能力の向上、自己の感情や関わりの特徴への気づきを促している。演習後にはポジティブな振り返りを重視し、学生同士および教員との対話を通して学びを深めている。看護過程の記録用紙は電子データ化し、LMS（Learning Management System）を活用して提出・指導・フィードバックを行っている。

また、授業の後半には、実習では受け持たないような強い症状をもつ患者（希死念慮や拒否などがある患者）を想定したシミュレーション演習も行っている。これにより、安全な場で、臨床における看護実践のトレーニングにつながると考えている。

臨地実習においても、演習と同様に電子データ化した記録用紙を、LMSを活用して提出・指導・フィードバックを行っている。学生は同時期に複数の施設で実習を行っているが、教員は全ての記録用紙を即座に確認することができるようになっている。これにより、学生の学修過程の可視化や指導内容の蓄積が可能となった。さらに、カンファレンスをオンラインで実施することで、時間や場所の制約を超えた学修環境を整備している。

本ワークショップでは、これらの取り組みの詳細、運用上の工夫や課題を紹介し、シミュレーション教育とDX化を 組み合わせた教育手法の可能性について、参加者との意見交換を行いたいと考えている。

本取り組みをワークショップで発表するにあたり、個人および関係機関が特定されないよう匿名化して扱う。取り組みで得られた記録・資料は目的以外には使用せず、適切に管理・保管した後、ワークショップ終了後に廃棄する。なお、本ワークショップに関連し、発表者全員について開示すべきCOI関係にある企業はありません。